

はじめに

本報告書には、「テキストと引用―原典、異本、翻案―」と題する、二〇一六年度のプロジェクト研究の活動成果をおさめている。年度当初に編者が意図した趣旨は以下のとおりである。

イタリア・ルネサンスを代表する芸術家レオナルド・ダ・ヴィンチ（一四五二―一五一九）が構想した絵画作品に通称「糸巻き棒の聖母子」と呼ばれる連作がある。中心となるふたりの人物像は共通している。全裸の幼児イエスは岩の上に身体を伸ばして直立した糸巻き棒を両腕で支え先端の十字形を見つめている。背後から左手で支える聖母は右手を空中に浮かべて不安そうな表情で彼を見守っている。

この連作では、レオナルドが直接関与したと考えられる二点の作品の存在が知られている。一点はこの巨匠に特有の、人物のぼかされた輪郭線が強調され、もう片方では《モナリザ》あるいは《聖アンナ》など彼が描く幻想的とも思える神秘的で深遠な山岳風景が際立っている。同主題の作品をレオナルドが描いたことは、一五〇一年ミラノでこの画家の工房を訪ねたひとりの修道士が書簡に記している。しかしながら記述にある「イエスは片足を糸巻き棒はいつた籠に置いている」という描写は上述の二作品には見出されない。およそ三〇から四〇におよぶ連作では後景にも中景にも新しい要素が加えられて多彩な表現を見出すことができる。興味深いことにそのなかには、言説によるのか、あるいはイメージに従ったのか、イエスの足が触れていないとは

いえ、前景に籠が大きく描かれた事例も存在している。

レオナルド・ダ・ヴィンチの「糸巻き棒の聖母子」は、一五〇一年にミラノでこの作品の「原典」が生まれ、それをもとにレオナルドの直接の関与のもと人物描写と風景表現とをそれぞれ強調する「異本」が制作され、数多くの「翻案」が誕生した経緯を推測させる。そしてその「翻案」に、「原典」に回帰する表現を見出すことができる事実は、「原典」「異本」そして「翻案」の流れが必ずしも一方向を目指すのではなく、往還する複雑な動きが根底に潜む可能性も推測させる。おそらくこの営為は芸術作品の創造そのものと重なるであろう。

本プロジェクトは、ヨーロッパ美術、東アジア美術のみならず、デザイン、「工芸」、映像など幅広い分野から、この「原典」「異本」「翻案」の創造の行程を考察／再考することを目指している。

本報告書の論考は例えば以下に要約できるのではないだろうか。

1) 一五世紀ヴェネツィアの画家カルパッチョが描き、後世に切断され今は別々に所蔵されている作品の再構成と機能を検討する上村論文、ミケランジェロ初期の絵画作品の代表作のひとつ《トンド・ドーニ》の図像的な源泉を提案する富澤論文、これら「原典」そのものの内容を考察する論考。

2) 室町時代に成立した絵巻物「芦引絵」に注目し再構成を試みながら、名所絵の伝統との関係を探る藤田論文、また、近世前期の摂津国の沿岸風景を表した屏風を対象に、「描かれた海運」そして文学に根

ざす景観表現など伝統的な描写との関係を探りながら、作者とその文
化的背景を考察する猪岡論文、これらは「翻案」に注目して「原典」
を考察する論考といえるだろう。また、一四世紀初めに成立した、時
宗の開祖一遍智真と後継者他阿真教の行状を描いた「縁起絵」を考察
する中村論文は、「異本」の表現から「原典」を論じる意欲的な試みで
ある。そして北宋時代に制作された「清明上河図」の場所を南方の都
市に置き換えた、明代中後期に描かれた「清明上河図」に特化して、
購買層、享受層、制作者を明確にしようと試みた陳論文は「翻案」そ
のものの新しい要素に注目した研究として特筆される。

3) 最後に、「原典」がどのように「翻案」されるのか、さらに「原
典」そのものが変化したときに「翻案」が被る影響に注目する論考が
挙げられる。前者として以下が指摘できるだろう。主に北イタリアを
中心とする中世自治都市国家が達成した自己表象に焦点をあて、その
先駆とされるフィレンツェの旧市庁舎に描かれたジョットによる表象
を「原典」とする系譜をあとづけながら、写本史料などに注目して新
たな系譜の可能性を模索する黒田論文。一七世紀前半の三〇年戦争に
よって、キリスト教的な騎士像による英雄的な描写から、凄惨を極め
る戦死者、掠奪の描出へと変化する戦争画の展開を探りあげた新保論
文。そして、イギリスの画家ターナーの色彩観を問う堀田論文。この
論考は、アリストテレス的な見方に一見従いながら、この伝統的な考
えともニュートンそしてゲーテの新しい提案とも異なる自説に固執す
る画家の、「原典」そして「翻案」に対する態度を論じている。

一方後者として、商業芸術であり監督の自己表現でもある戦後日本
映画を論じた千葉論文、「刑務所」という場で更正と自己啓発のために
制作された伝統工芸品の問題を論究する山崎論文、そしてアイヌの女
性が制作する工芸を論じた池田論文が挙げられる。これらの考察は「商
業映画」、「伝統工芸」、「アイヌ」、そして「女性」という時代の進展に
よってゆらぎ、変化する、「原典／概念」そのものの問題を視野に入れ
ている。一九四三年に結成された「女性美術家奉公隊」に参加しない
ものの、静物画を「慰問画」として制作した一女性画家の銃後の活動
を論じた吉良論文も、同じ関心を共有している。

なお執筆中の報告書の内容を踏まえて、二〇一七年一月一日に、
藤田紗樹、陳璐璐、猪岡萌菜、堀田匠悦、富澤萌、が事前発表をおこ
ない質疑応答の場を設けた。またこれにあわせて当時執筆中の博士論
文の中間報告を宮下美砂子がおこなった。彼女も、そして、千葉大学
とフィレンツェ大学との「博士論文の相互保護制度協定」によって入
学したフィレンツェ大学から二〇一七年三月二〇日に博士号を授与さ
れた太田智子も、これまでプロジェクト研究に積極的に関わりその成
果を博士論文に活かしていることを強調したい。

本報告書はRAの猪岡萌菜を中心に、藤田紗樹、堀田匠悦、富澤萌、
そして博士論文執筆のため論考の掲載はかなわなかったとはいえ宮下
美砂子、これら皆さんの協力で刊行することができた。深く感謝する。

二〇一七年三月二四日 上村清雄